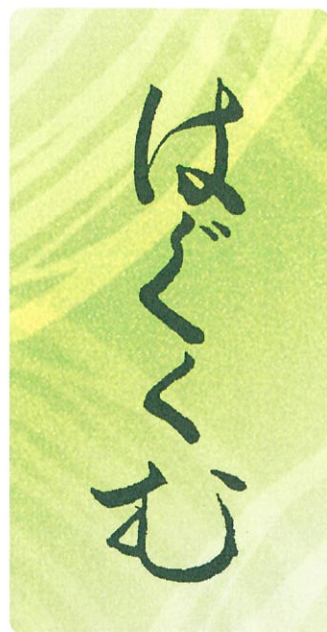




早春、寒桜に来て蜜をすうメジロ 撮影：法人事務局長 高木 真一



No.38 (平成31年)

社会福祉法人 鶴風会

東京小児療育病院
西多摩療育支援センター
後援会

連絡先

〒208-0011
東京都武蔵村山市学園4-10-1
電話 042-561-2521 (代表)
東京小児療育病院
Eメール torh@kakufuh.com

理念

私達は
障害児者の生命機能の維持
向上と生活援助のため誠実に
積極的に取り組み障害児者と
その家族を支援します

プレ・シンギュラリティ

社会福祉法人鶴風会
理事長 松尾 賢一

平成29年6月に理事長に就任してから早くも2年が経ちました。皆様方には、いつも鶴風会の事業にご支援をいただきまして有難うございます。

昨年は電子カルテやMRIを新しく導入し、業務に支障をきたさないようスムーズに移行し、運営の大幅な効率アップと質の向上を図って参りました。これからの当施設最大の課題は7年後を目標に老朽化した建物を新しく建て直すことです。現時点で新しい建物をイメージすると、今ある建物と似た構造となるでしょう。設計事務所にお願ひしても、既成概念に捕らわれた図面を提示されます。
通信の過去を見てもわかるように世の中の変化は著しく、例えば固定電話、公衆電

- 1頁 プレ・シンギュラリティ
- 2頁 障害児の母親が教えてくれた私の医師としての原点
- 3頁 東京小児だより
- 4頁 西多摩だより・行事報告(ハザー)
- 5頁 行事報告(オルフェ)
- 6頁 本の紹介・寄贈品
- 7頁 後援会だより
- 8頁 ご寄付者名簿

話からポケットベル、PHSなどの携帯電話を経てスマートフォンと僅か数10年で変遷してきました。今ではポケットベルの存在を知らない、公衆電話の使い方もわからない若者もいます。

最近社会の取り巻く環境は国内外ともに社会構造変革をもたらすグローバル化、デジタル化、ソーシャル化の波が複合することにより人工知能(AI)、インターネット(IoT)、ロボットテクノロジー、スーパーコンピュータなどの影響を少しずつ受け始めました。2029年にはAIが人間並みの知性に到達すると言われています。さらにAIが2045年には全人類の能力を超えると考えられています。

プレ・シンギュラリティという言葉をご存知でしょうか。文字通りシンギュラリティの前段階の事ですが、即ちAIが人類の知性を超える時代の前の事です。そんな超高速コンピュータが高度な技術課題を次々と解決し、今まで人が試行錯誤し材

料を用いて実験していたものが、コンピュータでシミュレーションし超高速で完全自動、並列的に行うことが出来ます。そして、今まで人が10年以上かかっていた仕事を、コンピュータでは数週間で出来てしまいます。この様なことが数年後には始まると考えられています。2011年にスーパーコンピュータ（京）が中国のスーパーコンピュータ（天河1号）を3倍も上回る演算処理速度を記録し1位になったことがあります。何年か前に、蓮舫議員が国産スーパーコンピュータ（京）の予算の議論で、2位じゃダメなんじゃないかと言った議論が話題になったことがありました。スーパーコンピュータの演算処理速度は、ここ10年間で1千倍、40年間で1兆倍の速さが達成されることが予想されています。

日本でもポスト「京」の次世代スーパーコンピュータで重点的に取り組む6つのテーマが決まりました。即ち生体分子システムの機能制御による革新的創薬基盤の構築、防災・環境問題、エネルギーの効率的な創出、新機能デバイス・高性能材料の創成、基礎科学の発展、将来性を考慮した実現化の検討です。これらは将来の国家繁栄に直結する事柄です。

施設の建て替えの時期は前述のように2027年となり、Aーが人類の知性に到達すると言われている2029年に近づきます。この頃には施設を取り巻く環境が大きく変動していることが予想されます。

鶴風会の未来を想像し、それを基に現状を振り返り、何をすべきかを考え、逆に過去の業績や経験を軸に現在の分析を行い、将来の目標を定めそれに向かって今から何をすべきかを過去と未来の両方向から考えることが大切であると思います。

厳しく変化の速い社会情勢の中で、質の高い健全な運営を目指しておりますが、将来を見据えた施設に発展させるために皆様にご理解をいただき、なお一層お力添えをよろしくお願い申し上げます。

余談になりますが、鶴風会の監事としておられる三木延義先生が単行本を出版致しました。三木先生の自伝を面白く書かれていて、当施設との関わりの経緯も後半に触れられています。鶴風会前理事長の中里厚先生が別枠で詳しくご紹介しておりますので是非皆様にもお読みいただきたいと思えます。

障害児の母親が教えてくれた 私の医師としての原点

社会福祉法人鶴風会後援会
会長 青木 継稔

◆Disease ヲ Illnessの相違

私が小児科医師となった数年目の若かりし頃、遺伝性代謝性変性疾患の1つでありますMLD (Methylchromatic Leucodystrophy: 異染性ロイコジストロフィ) の幼児M君の受持医となりました。疾患の診断法、酵素活性測定、生化学的所見、病態生理、画像所見などを注目・分析すること等に見なっていました。すなわち、病気をDiseaseを追いかけることに力を注ぎました。これは、純粋に医学の科学Scienceの面でした。

◆M君の母親から教わったこと

M君は、1歳過ぎまでは順調に成長し、歩行も可能となり、表情も豊かであり、「パパ」「ママ」「マンマ」等の有意義も話すようになっていました。しかし、徐々に歩けなくなり、言葉も失い、表情も乏しくなり、約半年ぐらいのうちに尖足位、寝たきりになってしまいました。呼んでもほとんど反応も少なくなってきました。MLDは全く治療法のない疾患であり、対症療法

のみでした。M君は、5〜6年後に亡くなってしまったのです。

私は、M君の母親と父親から家族愛、子ども愛、夫婦愛など色々教えて頂きました。

ある日、M君の母親から私に、「先生、横浜の私どもの家にいらっしやいませんか。そして、私や私の夫がMちゃんの世話をしている姿を見て下さいませんか。」とさりげない誘いを受け、勤務日ではない日曜日に朝早くから夜遅くまでお邪魔しました。

寝たきりでほとんど反応のないM君に対し、栄養を考えた食事の準備と4〜5分かけてのゆっくりとした食事を与える時間（1日3回）と水分補給の時間1日3〜4回。おむつ交換1日8〜9回（夜中に1回）。お風呂（2日に1回の入浴は夫婦共同にて、お風呂のない日は全身清拭）。その他に自分の食事や家事など楽しく実施され、ノートにM君の食事内容（献立）を詳細に記載し日記もきちんと書き込まれていらっしやいました。

「先生、こんな殺風景で単調な私たちの毎日の生活をどう感じられましたか。私が大変だとも思いませんが、一番に夫の気持ちや私に対する思いやりがすごいんですよ。夫は銀行マンで

月から金ときに土曜日も仕事であり、朝早く出勤し、夜遅くに帰ります。日曜日は、夫は私に『1日中遊んで来なさい。M君は自分が面倒見ます。』と言ってくれます。私は、身体を動かすことが大好きなのでダンス(社交ダンスではない)やバレエ(踊り)などを楽しみます。体力鍛錬とストレス発散になります。」「私も主人もこの子(M君)がとても可愛いですよ。心から可愛いから楽しく世話ができるんですよ。分かりますか。先生はこの子をどう思っているのかわかるのでしょうか。私どもの事を不思議に思っているのかわかるのでしょうか。』

私は、この母親の言葉が胸にグサッとささり締めつけられるような思い、深い感動を覚えたことを今でも忘れることはできません。

◆ウィリアム・オスラーの言葉

内科医であり医学教育者であるウィリアム・オスラー教授は、「病気にDiseaseを見るのではなく、患者の持つ病気・病人Illnessを診よ。」と若い医師を教育されました。「Diseaseは医学のScience(科学)の部分であり、Illnessは患者の持つDiseaseとArt(芸術)を診るArt(芸術)のみを指す。私自身、M君のDiseaseのみを追

いかけて、M君の持つIllnessの部分を見ていなかったようです。M君に対する両親の愛情、M君の家庭的背景、M君の社会的背景、医療費等の問題などを深く考えていなかったことを恥かしく思いました。M君の母親は、その後私に、子どもへの愛、家族愛、夫婦愛、人類愛などを教えて下さいました。

◆その後私の医学医療は大きく変化

病気にDiseaseを持つ患者に、病気に寄り添いあらゆる面に気を配り実践することを基本とし、日進月歩の医学・医療の知識・技能を磨き続けることも忘れず努力することをモットーとして来ました。まだまだ、医学・医療の奥は深く勉強することばかりですが生きている限り、私の理想に向かってさらに努力したいです。私の医学・医療の基本・原点は、MLDという難病・障害児を持つM君と両親です。いつも感謝を忘れません。



東京小児療育病院だより

東京小児療育病院
院長 椎木 俊秀

平成30年度も経営、診療・療育、施設整備などについてたくさんの方の目標・計画を立て取り組んでいます。

今年度は特に利用者の方の年中活動の質の向上を重視して取り組んでいます。本来、当然のことなのですが、職員の欠員が続いていたのと当院の利用者の方は医療度が高く、そちらの対応に力点を置かざるを得ない事情があり、その結果として日常生活を豊かに過ごしていたため時間の時間と活動が相対的に少なくなっていたという課題がありました。今年度は職員確保も少しずつ進み、職員も知恵を絞ってくれたおかげで、ご本人の好みや意向を尊重した個別活動やグループ活動など様々な工夫が始まっています。生活支援員や看護師だけでなく、事務やケースワーカーなどの職員の職員も一緒になった音楽活動グループも活動を始めました。地下1階の旧洗濯場を活動の場所に使えるよう工事も進めています。活動が活発になり利用者の方々に笑顔が増えたところです。職員も生き生きしてきま

した。

電子カルテが4月から本稼働になり、その有効活用を図らなければなりません。大変さもありますが、上手に使い分ければ随分便利な点もあるので、運用の工夫やソフトの改修を同時に進めています。業者も1年近くに渡って、ソフトの改修に協力してくれています。最初に比べ随分使い勝手は良くなっています。情報の共有を図り、診療・療育の向上、正確な報酬算定に有効に活用していきたいと思っています。

数年後の本館、外来、リハビリ、通所棟建て替えのための資金を得るために経営改善を進めています。増収を図り無駄な支出を削減すると同時に都に支援していただけるよう働きかけを行っています。先日も担当課長にお会いし、都立病院を運営するより少ない資金(補助金)で他のご施設の施設に比べて劣らない実績を示して、現在のサービスの維持、向上および都立施設利用者との民間施設利用者の公平性の観点(人員、設備)から正当な支援をしていただきたいとお願いして来ました。課題は山積していますが、後ろ向きになることなく、課題の発展的解決に向けて前進していきたいと思っています。



クラシックコンサートの様子

年の瀬における当法人恒例のチャリティコンサート「オルフェの会」を、平成30年12月2日(日)にグランドプリンスホテル新高輪にて開催いたしました。

今年度のオルフェの会は、初となる2組の公演を企画しました。

第1部のクラシックコンサートでは、普段はソロで活動されている5名の方に合奏を披露して頂きました。

チャリティコンサート 『オルフェの会』

法人事務局

瀬川祥子さん(ヴァイオリン)、村田恵子さん(ヴィオラ)、水谷川優子さん(チェロ)、鷺見精一さん(コントラバス)、山本貴志さん(ピアノ)による息の合った綺麗なハーモニーを聞かせて頂きました。

第2部は、落語です。落語というジャンルもオルフェの会では初めての公演となりました。



落語公演の様子

演じてくださったのは、三遊亭楽生師匠でした。笑点でお馴染みの6代目三遊亭円楽師匠の総領弟子の、そういったお話も演目の中で挟みつつ会場が笑いでいっぱいになった舞台となりました。



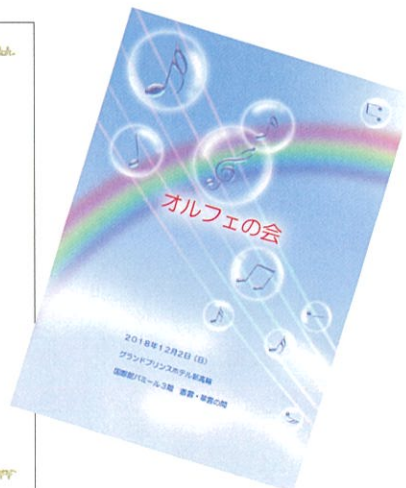
理事長のご挨拶

来賓の御挨拶では、炭山嘉伸先生(学校法人東邦大学理事長)と安藤高夫先生(自由民主党衆議院議員、医療法人社団永生会理事長)よりご挨拶を頂戴し、高松研先生(東邦大学学長)より乾杯のご発声を賜りました。

その後、会食が始まる中、法人の活動についてご理解いただくため、西多摩療育支援センターセンター長の鶴岡より施設紹介をいたしました。

今年度も皆様からの温かいご支援により、盛況のうちにオルフェの会を閉幕できましたこと、心より感謝いたします。

プログラム		第1部 クラシックコンサート演目	
1. 開会の挨拶 (12:00)	司会: オルフェの会世話人 井上 和子 社会福祉法人鶴岡会 理事長 松尾 興二	出演	瀬川 祥子 (ヴァイオリン) 村田 恵子 (ヴィオラ) 水谷川優子 (チェロ) 鷺見 精一 (コントラバス) 山本 貴志 (ピアノ)
2. 来賓のご挨拶	学校法人東邦大学 理事長 炭山 嘉伸 様 医療法人社団永生会 理事長 安藤 高夫 様	演目	1. ヘンデル ハルヴォルセン (編曲) パッサカリア (ヴァイオリンとチェロ) 2. ベートーヴェン 弦楽三重奏のためのセレナーデ 作品8 二重奏 (ヴァイオリン ヴィオラ チェロ) から アンダンテ クラリアレグレット-マルシア アレグロ 3. シューベルト ピアノ五重奏曲「ます」D667イ長調
3. 乾杯	東邦大学 学長 高松 研 様	第1楽章	アレグロ ヴィヴァーチェ
4. 開宴 (12:30)	ごゆっくりご覧ください [施設紹介] 西多摩療育支援センターセンター長 鶴岡 広	第2楽章	アンダンテ
5. コンサート&落語 (13:30)	第1部 クラシックコンサート 第2部 落語	第3楽章	スケルツォ プレスト
6. 閉会の挨拶 (15:00)	オルフェの会主催 社会福祉法人鶴岡会後援会 会長 青木 純治	第4楽章	主題と変奏アンダンティーノ アレグレット
		第5楽章	アレグロ ジュスト
		第2部 落語	出演 三遊亭楽生



本の紹介

社会福祉法人 鶴風会

理事 中里 厚

「老いは愉し 野辺の花よ」

―人生は会社を辞めてから―

著者 三木延義

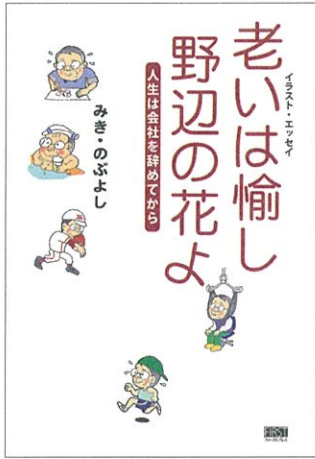
発行所

株式会社ファーストプレス

定価 1080円

2019年3月1日

第1刷発行



社会福祉法人鶴風会の監事である三木延義先生が「老いは愉し 野辺の花よ―人生は会社を辞めてから―」を出版されました。

三木先生には鶴風会としてはいつも運営面に関して大変お世話になっており感謝いたしております。

法人の監事の著書と言つとなんだか堅くて怖い感じがしますが、この本は全く逆です。三木先生、長年出版関係に従事していた関係で大変読み易いエッセイを書いて戴きました。また先生は若い頃、漫画家を志していた関係で自身の楽しい漫画のイラストがたくさん入っているのも特徴です。卓球、野球、シヌノーケリング、山歩き、秘湯めぐりなどあらゆることに興味を示し研究会という名目で各種参加し、最後は飲み会交流会ということ定年後の人生を充実させています。多彩な趣味を持つことから多くの人と巡り合い多くの経験をし、いわば人生の達人です。定年後や老年期をチコちゃん流に言えば「ボーとしてるんじゃないよ」ということでしょうか。若い時(18歳)と高齢期(81歳)では勿論大きく違います。

- ・恋に溺れるのが18歳、風呂でおぼれるのが81歳

- ・左右に揺れながら生きるのが18歳、左右に揺れながら歩くのが81歳

- ・スマホを外せないのが18歳、入れ歯を外せないのが81歳

- ・まだ何も知らないのが18歳、もう何も覚えていないのが81歳

人生はこんなもんであつたという間に過ぎていきます。三木先生から多くの趣味を持ちあらゆることに興味をしめし、老後を無駄にしないで楽しんで下さいというメッセージの本です。たいへん楽しい本ですので、是非皆さん御一読下さい。



東京武蔵村山ロータリー クラブからの寄贈品

庶務課長 乙幡 和明

東京武蔵村山ロータリークラブからボッチャボールセット一式・スヌーズレン機器一式をご寄贈いただきました。ボッチャは、ヨーロッパで生まれた障害児者のために考案されたスポーツでパラリンピックの正式種目です。ジャックボール(目標球)と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当たったりして、いかに近づけるかを競います。障害によりボールを投げるのができなくても、勾配具(ランプ)を使い、自分の意思を介助者に伝えることで、参加できます。競技は障害の程度によってクラス別に行われ、個人戦と団体戦があります。当院の入所児童も全国特別支援学校ボッチャ大会「ボッチャ甲子園」に村山特別支援学校の代表として出場し活躍しており、日々病棟で練習に励んでおり、大変喜んでいきます。

スヌーズレンは、重度の知的障害者の方が、「光」「映像」「音」「温度」「触覚」「香り」「味」「振動」など



「贈呈式の様子」

様々な刺激の中から自分が好む刺激を受けることでリラックスするためのものです。
 専用の部屋があると便利なため、現在、病棟地下1階の旧洗濯室を改修中です。完成後はそこで活用させていただきます。

この様に、ご寄贈いただいた品を活用し、利用者の皆様の生活の質の向上に取り組んでまいります。
 ありがとうございます。

社会福祉法人 鶴風会



後援会だより

はぐくむ 愛をこめて 抱きしめること

東邦大学看護学部長 福島 富士子

中国の洛陽で、看護師の方々に日本の母子保健の現状と課題について講演をしました。人と人との関係が希薄になつている日本について論じましたが、今はまだ人との関係性が濃い洛陽ではなかなか理解しがたい内容であったかもしれないですね。洛陽で垣間見た母子の風景は日本とすいぶん違っていました。様々な場所で、子どもが、母親に寄り添いスキンシップをねだる光景を多く見ました。母親の首に両手を回し、抱きついたり、脇腹に顔を寄り寄せたりしているのです。母親もいやな顔をすることもなく、当たり前のように対応しています。何気ない場面なのですが、とても懐かしく感じる風景でした。今の日本の母子の風景はどうでしょうか。

待合室では母親が椅子に一人座り、ずっと携帯を操作していて、傍らにいる子どもは停められたベビーカーに乗り、一人静かにしている光景が目につきます。

洛陽では一歳までの母乳率は約90%のこと。日本では一か月の母乳率が

約50%です。母乳率の違いだけで語るには危険だと思いますが、スキンシップの量が愛着形成に影響することは最近の脳科学の研究からも言われています。スキンシップの量の違いはそれぞれの国のこどもたちの未来に影響しないのだろうかと思つたのです。私は人が人との信頼関係を築くのは母子のスキンシップが原点であると講演しました。母国が失いかけている関係性の構築と愛着関係の大事さについて、まだそれが息づくところの、人懐っこく、キラキラとした熱いまなざしで話を聞いてくれる人々に、熱く語っていることはとても奇妙な感覚でした。

五島瑳智子先生はご自身の著書の中で「子育ての「育む」の原義は「羽包む」であり、鳥が羽で包み込むように子をかばい慈しむこと。英語でも抱擁を「HUG（ハグ）」といい、両手と胸で愛をこめて抱きしめることは子どもにとって何よりも大事なことであり」と述べられています。

私たちは昭和の時代に戻ることはできませんが、来る未来は現在の結果なのだということを肝に銘じて、今こそ、親子の愛着について真剣に取り組みたいと思つています。

